

演 題 名：豚丹毒菌の疫学的解析データのフィードバック効果

発表者氏名：・中村栄久 1) 矢野克也 2)

発表者所属：1) 愛媛県食肉衛生検査センター、2) 愛媛県家畜病性鑑定室

1. はじめに： 愛媛県では、豚丹毒はワクチン接種率が高いにも関わらず、当センターで全部廃棄される疾病の上位を占めている。平成 14 年度は、173 頭廃棄処分しており、そのうち 95%は関節炎型である。今回豚丹毒による廃棄率を減少させるために、その発生データを、畜産サイドにフィードバックしたところ、発生減少に繋がる良好な成績が得られたので報告する。

2. 材料および方法： 平成 12 年度から 3 年間の豚丹毒発生状況データを分析した。また平成 14 年 7 月から平成 15 年 4 月まで、当センターで分離した豚丹毒菌（県内 29 農場 125 株、県外 1 農場 1 株）及び、豚丹毒生ワクチン（小金井株）を用い、RAPD-PCR 法により解析を行った。プライマーには D9355 (5' CCG GAT CCG TGA TGC GGT GCG 3') を使用した。

3. 成績および考察： 平成 12 年、13 年度の県内産の豚については、散発事例が主であったが、平成 14 年度は特定の農場で多発する傾向を認めた。検出数が多い 4 農場で全体の半数（A農場 22 頭、B農場 31 頭、C農場 14 頭、D農場 21 頭）を占め、残りの 25 農場では散発例であった。このうち発育不良豚は 17 頭で、3 農場（A、B、C農場）がそのほとんどを占めていた。これらの結果を畜産サイドにフィードバックしたところ、C及びD農場については平成 15 年 3 月より現在まで、豚丹毒菌は検出されていない。

また分離した菌株を RAPD-PCR 法で解析したところ、126 株中 72 株はワクチン株と同一パターンを示した。フィードバック成果のあった 2 農場においては、ワクチンの適切な接種をはじめとした衛生対策指導が効果的になされていることが伺えた。

以上のことから、と畜データの収集分析及び情報処理を円滑に進めることが、と畜検査での罹患率減少に繋がる大きな要因であることを実感した。

また今回行った RAPD-PCR 法は、現行のワクチンマーカーとして定義されていないため、本法による成績によってワクチン株か否を断言することはできないが、解析が進めばワクチン株と野外株を簡便に判別できる方法であることから、将来的な課題としてワクチン株による関節炎型豚丹毒を全廃棄処分の対象とすべきか検討する必要性を感じた。